

2000年(平成12年)10月4日(水曜日)

「これほどの人が、忘れられたままではいけない」。東京医科歯科大の若松秀俊教授(まきは)は今、大正から昭和初期に旧制松江高校(現在の島根大)で教壇に立ったドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ博士(一八九二―一九七二)の足跡を調べている。遠隔治療システムなど医療用機器開発が専門の若松さんが、自ら「畑違い」という調査に乗り出したのは、小さな出会いがきっかけだった。

# 心のファイル

昨年九月、ドイツ・シュツットガルト。出張で泊まったホテルの食堂で、若松さんが同僚と朝食を取っている。別のテーブルにいた上品な女性がこちらにはほほ笑みかけた。

不思議に思い、語りかけると、「私は少女時代に松江や横浜、東京で暮らしました。日本語がしゃべれて」と答えた。女性は、ドイツ在住のフリーデルン・カルシュ



博士(カルシュ博士提供) 若松さん

さん(まきは)。その父がカルシュ博士だった。

若松さんは帰国後、松江市役所や島根県庁、島根大に問い合わせたが、博士を知る人はほとんどいなかった。だが、フリーデルンさんの姉メヒティルトさん(三〇米田在住)の紹介により、各地で教え子が健在だと分かり、手紙を送ったり対面したりと交流を始めた。

多くのことが分かった。博士は一九二五年に来日、旧制松江高校でドイツ語を十四年間教えた。東西の哲学や自然科学など幅広い学識を持ち、その教室からは池田、佐藤内閣で自治相を務めた赤沢正道氏や、「黒崎の鐘」で知られる医学者の永井隆氏をはじめ、各界で活躍する人材が輩出した。

同高を去った後、四〇年から五年間は横浜や東京に住み、外交官としてドイツ大使館に勤めていた。

調査が進むにつれ、若松さんは一つの驚きに遭遇した。一つは八十

## 忘れ去られた日本の恩師 ドイツ人哲学者

代以上の高齢となったかつての生徒たちが、この外国人教師をいまなお慕ってやまないことだ。同僚や生徒に優しく、人望が厚かったこと。自宅まで搬る難われた手料理。日本を深く愛し、休日を利用して松江周辺を散策していたその姿。思い出して涙を浮かべる教え子たちの姿の前に若松さんは、博士が当時の若者の心に刻んだ印象の深さを語る。

も一つ一つの驚きは、博士が今ではすっかり忘れられていたことだ。若松さんは惜しみますにいられない。だが専門の研究でもないのに私費で調査を続ける若松さんの行動が呼び水となり、高齢の教え子らは今年七月、「カルシュ博士を顕彰する会」を創設した。長い時を経て資料集めなどに乗り出した。若松さんも「博士を知る人の生の声が聞けるのは今のうち」と、情報提供などをさらに呼びかける。また「博士の学問上の業績を客観的に判断するのは、私だけでは難しい」と、哲学史やドイツ文学に詳しい研究者の協力も心待ちにしている。

(文化部・三原 信) ※若松教授の連絡先は、〒113-8501 東京都文京区湯島1-5-45、東京医科歯科大医学部 医用理工学講座。

心に刻んでおきたい人々や出来事についての原稿をお寄せください。情報提供でも結構です。  
①字数 800字前後  
②送り先 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 東京新聞社会部「心のファイル」欄係、ファックスは03(3472)8147、03(3471)4940、電子メールは shakai@tokyo-np.co.jp